〔千葉医学　77：287～298，2001〕

〔学会〕　第1011回 千葉医学会例会
千葉大学医学部第二外科例会

日　時：平成12年12月16日（土）9：00～17：00
12月17日（日）9：15～16：30
場　所：千葉大学医学部附属病院3階　第1講堂

1．腹部リンパ節転移陽性食道癌の検討

太田義人，鍋谷圭宏（千大）

【目的と対象】1990～99年に教室で3領域郭清を伴う食道切除術を施行した138症例を対象として，腹部リンパ節転移陽性食道癌の特徴を検討した。【結果】(1)腹部リンパ節転移はCe癌と粘膜癌以外の49例（35.5%）で陽性で，転移個数5個以上の症例が有意に予後不良であった。(2)血行性臓器転移例は全て腹部リンパ節転移陽性であった。(3)腹部リンパ節転移は1，2，3，7番中心であったが，転移が胃周囲リンパ節のみの症例は，他の腹部リンパ節転移も伴う症例に比べて有意に臓器再発率が低く予後良好であった。【総括】腹部リンパ節転移陽性例は臓器転移の可能性が高く，特に転移個数5個以上あるいは胃周囲以外の腹部リンパ節転移陽性の症例はsystemic diseaseと考えられ，的確な術前診断と集学的治療が必要である。

2．胃癌患者における手術術式と術後QOL

角田慎輔，林　秀樹（千大）

各種胃癌手術術式，臨床病理学的因子と術後の体重及び栄養状態との関連について検討した。年齢，性別，肉眼型，組織型の違いによる術後の体重及び栄養状態に差を認めなかった。手術術式に関して，部分切除術およびリンパ節郭清度D0～D1の縮小手術において術後有意に良好な体重回復や血清総タンパク値，血清アルブミン値を認めた。

3．再発食道癌に対する治療の検討

北林宏之，島田英昭（千大）

当科に於ける再発食道癌の治療と治療効果ならびに予後との関係について検討した。対象は1990年1月から2000年5月31日までに当科にて食道癌切除術を施行した258例のうち2000年12月1日現在で再発が確認された97例。再発治療効果・予後は，1年以内再発・複数再発・腫瘍径3センチ以上の症例では不良であった。また，3センチ未満で単発の再発症例では再切除術が有効であった。

5．大腸癌術後早期（1年以内）死亡例の検討

早野康一，高山　亘（千大）

1980年1月から1999年12月までの大腸癌切除例639例のうち1年以内早期死亡例は98例で，ステージ別の早期死亡率はステージ0で6.9%，1で2.7%，2で5.6%，3で9.2%，4で45.8%であった。ステージ3までの死亡原因は原病死17例，他病死10例，入院死5例であった。ステージ4ではP2，3症例の88.9%が1年以内に死亡し，P0，1症例ではH3が早期死亡要因となっていた。

6．十二指腸癌の臨床病理学的検討

松永晃直，西郷健一（千大）

1977年から2000年の間に当科で経験した原発性十二指腸癌18例につき検討した。男女比8：10。占拠部位は下行脚が12例と大半を占めていた。切除例は10例で，リンパ節転移，膵浸潤のない症例の方が予後良好だった。8例が非切除で，遠隔転移・局所進展がその原因であった。十二指腸癌の予後に寄与する最も重要な因子は切除可能か否かであり，早期に診断し切除率を向上させることが，予後改善に繋がると考えられた。

7．食道癌ネオアジュバント療法の効果判定法の検討

間宮俊太，岡住慎一（千大）

食道癌化学放射線療法施行後切除42例を検討し，X線縮小率，dynamic CT，EUS，内視鏡，内視鏡生検による総合的評価を行い，奏効例の判定ではSensitivity: 96.3%，Specificity：40.0%，Accuracy：76.2%であり，CR例の判定ではそれぞれ，55.6%，97.0%，88.1%であった。